平成28年度第1回印西市教育振興基本計画策定委員会　会議録

1　日　　時　　平成28年8月4日（木）午後2：00～午後3：30

2　場　　所　　印西市役所庁舎別館１階　農業委員会会議室

3　出席委員　　福留強委員（委員長）、青木和浩委員（副委員長）、岡敬一郎委員、篠原英光委員、

池亀節雄委員、桜井繁光委員、板倉三郎委員、五十嵐靖宏委員、青柳豊子委員

4　欠席委員　　西田裕子委員

5　事務局　　大木教育長、小山教育部長、山崎教育部参事、岩井主幹、高橋副主幹

関口主査、北林主査、村越主査

6　傍聴者　　なし

7　議　　題　　（1）印西市教育振興基本計画策定委員会の役割について

（2）リーディング施策について

（3）その他

8　議事録　　要点筆記

◇会長及び副会長選出

委員の互選により、福留強委員（委員長）、青木和浩委員（副委員長）を決定した。

議　事 （1）及び（2）　～事務局より（1）及び（2）に関する資料を説明

事務局：（2）リーディング施策の概略。

資料は、これから検討する「重点的な施策」及び「横断的な施策」などにあたるリーディング施策をイメージしていただくための例示である。

「リーディング施策例１」は、学校教育に必要な学校と地域・家庭が連携・協力する教育の仕組み、また、地域・市民の生涯学習、スポーツ、文化芸術の学習や活動成果を人づくり・地域づくりに活かす仕組みを構築することが目的であり、これを「学びのためのコミュニティ」として本市独自の生涯学習の構築を目指すもの。

「リーディング施策例２」は、東京オリンピック・パラリンピックという多くの市民の意識が高まるイベントを通じ、各分野の施策を横断的に関連させ、学習や交流を推進することが目的である。具体的には小学校低学年からの英語教育の充実、国際感覚、国際理解教育の推進、子どもから高齢者まですべての市民のスポーツや健康に対する関心、参加意識の向上、生涯学習におけるボランティアの育成、地域づくりの担い手の育成、市の文化の発信と愛着・誇りの醸成などに関する施策の充実を想定している。

「リーディング施策例３」は　地域の一員である大学・企業等と連携し、大学の知識や人的資源を生かした様々な学びの場を連携することが目的である。

この中で、特に子どもから高齢者まですべての市民が健やかな心と体を育むための教育という視点の「健康指導、運動指導の連携」について、独自のノウハウを持つ順天堂大学等と連携して、児童生徒一人ひとりのプログラムを作成することを目標とする。このプログラムを基に、子どもの生活（活動）の場である学校、家庭、地域において一体的かつ継続的にそれぞれの役割分担で進める教育環境を構築することで、児童生徒が継続して成人から高齢者まで取り組んでいくことが期待でき、やがては多くの市民が健やかな体と心を育むことも期待できる。

この考え方を市全体のプロジェクトとして徐々に拡大し、乳幼児の時期から高齢者に至るまで、生涯を通じた「生涯学習（学び）、筋力、食育（栄養・口腔力）」の三位一体型のプログラムを作成し、市全体で健康、体力・スポーツ能力向上やロコモティブシンドロームの予防を目的とした連携事業に拡大することで、すべての市民が参加する生涯学習に成熟していきたいと考えている。

委　員：「リーディング施策例　２」に関連し、スポーツ関係で海外チームと市民や学生との交流を実現したい。

委　員：横断施策では、どこが所管し、何をするかが一番大きな問題になる。計画を事業化する際は目標値設定が重要になるが、リーディング施策例１から３のタイトルはとても良いものの、評価方法が見えないために方向性だけに留まる可能性もある。これを学校教育の中でどう導くか、地域の中にどう落とし込むか、というイメージをもう少し明確にできると良い。子どもの体力の観点だけでなく、障がい者教育など教育を幅広い視点から捉えた中で施策を記載する必要性を感じる。

事務局：現段階では、リーディング施策で具体的に何をしていくかがまだできていない。推進体制は地域を単位として、例えば、学びのフォーラムでは地域の人たちが集まり、地域を活性化し、それを市全体に広めていくことも考えたい。今後、事業を具体的に提案しながら、委員会の意見を踏まえて議論を深めていきたい。

委員長：地域連携のシステムは非常に大事であり、それを事業としてしっかりと実施してもらいたい。教育員会以外の部署が所管する男女共同参画も高齢化の問題など、教育委員会だけでは施策の実現は難しいテーマも多く、連携システムは大変重要になるため、こうした問題も各委員会で議論を進めていただきたい。

委　員：生涯学習を全市的に取り組んでいくために、「人が街をつくる」という共通認識が必要であるとともに、市民力や地域力をもっと高めていく、市民活動を活発化するための、いろいろな面での横断的な取り組みが必要である。また、印西市の勢いのある新しいまちづくりのために、昔ながらの産業や自然などの特性をもっと生かす取り組みができたらいいと考える。

委　員：学校教育には学校での学びを豊かにすることと、学校が地域の中で果たす役割があり、どのように整理していくか難しい問題である。また、学校教育、生涯学習、スポーツ、文化芸術の４分野はそれぞれが区切れるものではなく、入り組んでいる。学校教育にも生涯学習、スポーツ、文化芸術も当然含まれている。それぞれの検討委員会でどこまでの話をし、どこまでまとめていくかを本日の会議を通して掴みたい。

委員長：文部科学省の生涯学習政策局社会教育課に「地域・学校支援推進室」ができた。これからの教育は学校だけが役割と責任を負うのではなく、これまで以上に学校、家庭、地域の連携協力の下で子どもを育てる体制を整えていかなければならないということで設置されている。それだけ学校教育が切迫した問題となっていると感じた。

委　員：学校教育、生涯学習、スポーツ、文化芸術という4つの分野それぞれの問題点がある。所属するスポーツ検討委員会に問題点を持ち寄り、整理しなければならないと思った。それぞれの分野でこういう問題があるので、それを解決するための話し合いをしていただくと、検討委員会へ持ち帰ることができる。

委員長：委員のおっしゃるとおり、4つの分野それぞれの課題を具体的に出すことで施策のイメージが固まっていくことになる。

委　員：印西市に生まれた育った人間から現状を見ると、移住してきた住民が多くなった。これからの印西市を考える時、移住してきた住民がそれまでの経験を生かしていけるシステムを創り、学校や地域の人材を育成することができればと思う。

自分も参加している市民アカデミーは地元出身者ではなく、他から移住してきた人がほとんどである。社会で認められた地位や様々な経験を積んできた人が多く、そうした人たちの能力を活かせるシステムができればと思う。それは社会教育だけではなく、スポーツや文化芸術でも同様である。

委　員：現行施策でも学校教育、生涯学習、スポーツ、文化芸術の4つの分野がバランスよく進められており、さらにより強固につないでいくという方向性になると思う。

本校は本年度から1名の日本人の英語教師が英語指導を行っている。この実施例のように、テーマを明確にし、それをより重点的に進めていくことで印西市の特徴が出てくる。ゼロからではなく、今の取り組みを基礎にさらにどこを強調すれば印西市の良さが表れるのかを考えて計画策定をお願いしたい。

委　員：平成25年度から平成29年度までの教育基本計画の中に課題と今後の問題点が出ている。私は4つの分野それぞれについて何が特徴で、何が課題なのかを見直してみたが、まだ結論は出ていない。事務局でも現行の教育基本計画を検証し、それぞれの分野の検討委員会が議論できるような流れを進めていただきたい。それを怠ると格好のよいだけの計画で終わってしまうことを懸念している。

委員長：課題については、各検討委員会で抽出していただき、それを反映させたものを本策定委員会に提出している。

委　員：学校教育検討員会ではまだ出していないですが、これから出していくはずである。

委　員：一番良いことは現行のものを強化することであり、４つの分野の共通課題がある場合、それをどの分野にあてはめていくかが横断的施策のスタートになる。

また、乳幼児から高齢者まで生涯を通じた「生涯学習（学び）、筋力、食育（栄養・口腔力）」の三位一体型のプログラムについてだが、大学、病院、企業などが中心となり、子どもたちを強化していくことはできないことではない。その核となるところが、例えば、順天堂大学ですべてやることはできないし、小学校でもやはりできない。できるとすれば教育委員会になる。教育委員会の権限として、小学生や中学生に対して比較的事業化がしやすい。

一方で、対象が高齢者であるとか、17才でも高校に行っていない場合には所管が違うため、今の計画からはみ出してしまうことになるのではないか。

実際には市内の小学校教育の現場に大学生が入ったり、保健師や栄養士が入ったり、市民の力が入ったり、あるいは子どもたちがアカデミーに行ったりなどが何本あったとか、参加者が何名いたとか、そういうことで評価されてしまうことを懸念している。

委員長：縦割りの行政の中で教育委員会からはみ出した事業は、市長が調整するべき。総合計画に入っているのに、途中で市長が変わったからやらないということでは困る。私たちが議論しているのは教育委員会所管の事業なので、教育委員会に調整してもらう。計画には合同でする事業もあれば連携でする事業もある。５年先を見越して入れておかなければならない事業ばかりである。

委　員：コンサルタントが総合計画との整合性を図るはずである。要は私達が大きな幹が見えていないため、総合計画という大きな幹と全然違う話をしていたら見当外れとなってしまう。計画策定はどのようなプロセスになるのか。

事務局：策定委員会で出された案件に対してイメージをもっていただき、各検討委員会に戻って、課題を整理し、まとめていただく。それを事務局に戻していただく。

委　員：リーディング施策では、スポーツに関しては健康で逞しくという意図が伝わってきたが、英語教育など文化的な要素の教育施策も大事になる。それが絵であったり、音楽であったり、文化性や芸術性も備えたものがあれば良いと思う。

委　員：障がい者差別に対する視点も大事な学校教育になる。その点に関しての取り組みもお願いしたい。

委　員：障がい者教育とともに、一流選手が来て指導するだけではなく、子どもたちがおもてなしをすることで、どのような教育効果が表れるのかも目指したい。東京オリンピック・パラリンピックにはどうしてもスポーツというイメージがあるが、芸術的なものや障がい者への差別教育など、切り口をいくつか考えていくことで印西市の施策となり、市民のレベルも上がり、それを市民が支えるという相乗効果が見いだせると思う。

委員長：オリンピックまでにおもてなしの心を身に付けた人材を小学校5年から1万人育てる構想で、印西市の公民館を含めて「青少年おもてなしカレッジ」という学習が全国10か所でやっている。挨拶、身の回りのことができる、自己表現ができる、高校生には外国語でのあいさつなどのプログラムを組み、それを指導するのがおじいちゃん、おばあちゃんなどである。これが進むと国際的なまちづくりを目指すこともできる。

　以上で議事を終了する。委員の皆さまには協力を感謝する。

以上

　　　平成２８年度第１回印西市教育振興基本計画策定委員会の会議録は、事実と相違ないことを承認する。

　　　平成２８年　　　月　　　日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　印西市教育振興基本計画策定委員会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　委　員